



千川通りと庚申通り越しに、練馬消防署を見る。車や人の往来が絶えないにぎやかな環境だ。右手奥の通りを進むと警察署がある。



建て替え前の練馬消防署。現在と同じ場所にあり、当時の施工にも加賀田組が携わった。竣工は1971年。(提供：(株)加賀田組)

工事概要

発注者：東京都知事
 監理者：東京消防庁総務部施設課
 設計者：株式会社杉原設計事務所
 施工者：加賀田・河端建設共同企業体
 工期：平成24年12月～平成27年2月
 工事規模：地下1階、地上8階



鉄骨造と言っても違和感はない、H型鋼800×250mmの2つを組み合わせた十字形の柱が鎮座する6階の作業風景。居住スペースとして計画されているフロア。まわりに大きな建物はなく、景色もバツクンだ。

開署から約七〇年間、地域の安全を守り続ける施設

練馬消防署は、東京消防庁の下部機関の一つで、東京都練馬区東側の消防業務を担当している。光が丘消防署、石神井消防署、板橋消防署、志村消防署といった五つの消防署からなる東京消防庁第十消防方面本部に属する消防署でもある。今回の現場は、地域住民の主要な交通網となっている西武池袋線や都営地下鉄大江戸線などが乗り入れる練馬駅から徒歩数分の場所にある。千川通りと庚申通りといった主要道路に面する角地で、練馬警察署と隣接しており、まさ

に街の防災拠点としての役割を担うにはベストポジションだ。

練馬消防署の歴史は、戦後間もない昭和二十一年に開署してから始まる。当時からポンプ車六台を有し、三つの出張所、約百名の消防職員と七百名を超える警防団(後の消防団)を統括する消防署だった。その後、約七〇年間に渡って、練馬区の防災拠点として主な役割を担ってきた。「消防署と警察署が隣接していることで、地域住民の方は、すごく安心して生活されているようです」とは、この現場を統括する丸山所長。昭和四十六年に改築された旧庁舎に代わり、さらなる防災力強化のため、平成

現場発見

防災への強い思いに感謝を込めて

東京消防庁練馬消防署庁舎(二四)新築工事

東京都二三区の最北西、練馬区に今回の建物は建設されている。練馬区は木造住宅の密集地帯が多く、道路も細く曲がった場所が多い。そのため、地震や火災などが起こった際、被害が広がりやすいとも言われている。こうした街の防災拠点となる練馬消防署新庁舎の建設に携わる加賀田・河端建設共同企業体、丸山栄策氏に取材した。

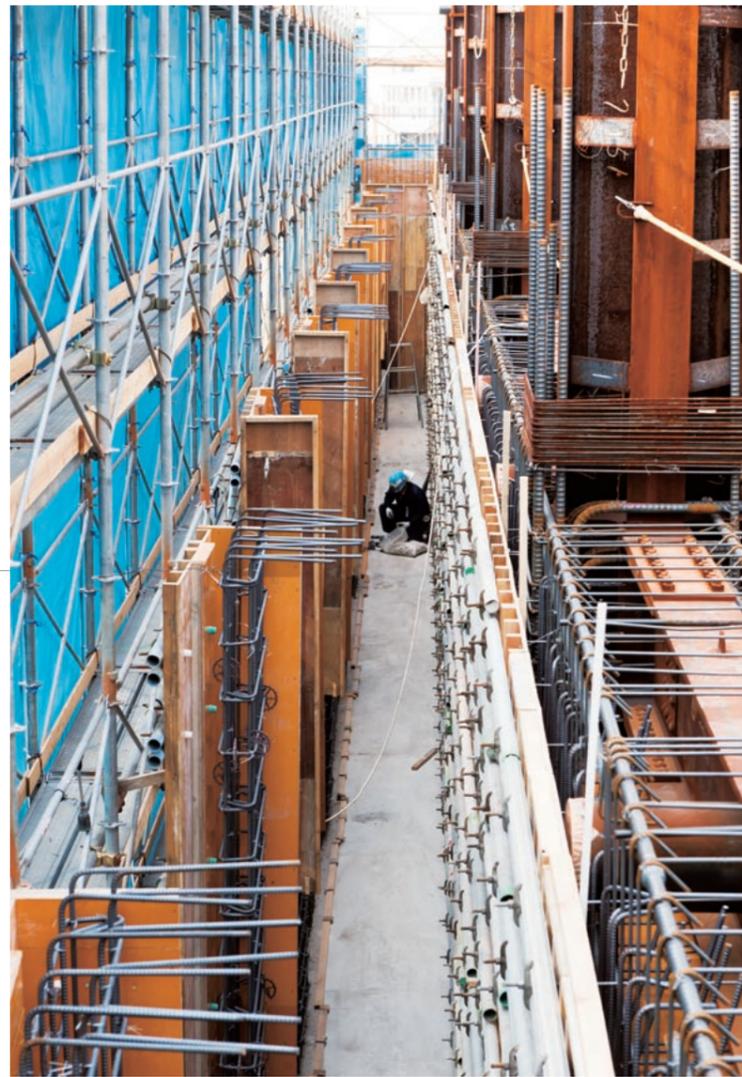


二十四年十一月から新庁舎の建設計画がスタートした。地上八階、地下一階、約五、〇〇〇平方メートルの床面積を有する新庁舎は、平成二十七年二月に完成する予定だ。現在は、六階までの躯体工事が完了し、各階の仕上げ工事が順次進められている。

防災への強い思い

この建物で採用されている構造は、鉄骨鉄筋コンクリート(SRC)造だ。これは、鉄骨で柱や梁等の骨組みを組み、その周りに鉄筋を配筋してコンクリートを打ち込む、いわば、鉄骨(S)造と鉄筋コンクリート(RC)造の長所を兼ね備えた構造といえる。つまり、鋼材がコンクリートによって被覆されていることにより耐火性が向上する。さらに、被覆された鋼材が、しなるように作用することで建物の揺れを吸収するため、耐震性能にも優れており、柱や梁の断面を小さくできるメリットがある。その一方で、施工は複雑だ。

現場では、前面道路から七階、八階の鉄骨を仰ぎ見ることができる。それらは、この建物がS造であるかの如く、しっかりとした部材断面に見える。構造図をみると、約八層のグリッド状に、一層四方の柱型が配置され、高さ一・一層×幅〇・八五層の梁型でつながれている。通常の八階建てRC造の建物と比べれば、倍近い部材断面だ。丸山所長がその訳を教えてください。



6階住居スペースのバルコニー部分建設風景。非常用侵入口も兼ねている。

「地震動に対して時刻歴応答解析を行い、その安全性を確認するとともに、建築基準法で決められた保有耐力の一・五倍の耐力を有するように設計されているからです」。どんなに大きな地震がきても、ビクともしない強さの建物だということが理解できた。

SRC造の施工では、鉄骨と鉄筋が複雑に絡み合うため、密実なコンクリートの打設が、工事の肝だという。監督員として、毎週打ち合わせを重ねている東京消防庁総務部施設課の職員は、コンクリートを打設する際には必ず立ち会い、打設前のコンクリートを素手でつかみ、砂

利の大きさなどを確認するそうだ。「施設課の方々は、気持ちがいとも前面にでていて、建物品質へのこだわりがとても強いです」と丸山所長。いざという時の防災拠点となる建物として、必要な安全性を追求すればこそその行動だ。

消防署を探访する

消防署は、火災予防運動などを通して、地域の人々へ、防災に関する啓蒙活動を行う場所であるとともに、消防士にとっては二四時間働くまさに不夜城だ。しかし、消防署内で何をやっているか、市民からはなかなかわからない。そ

いる。

敷地の奥、現在は資材置き場となっている場所には、消防士が日々訓練を行うための施設、訓練塔が別棟で計画されている。この他にも、建物内部にはいくつか訓練用の場所が用意されている。放水訓練が行われる屋内訓練室、体力強化のための体育訓練室などがそれにあたる。もちろん防災関連の備蓄室や救援資材庫など、災害時に必要となる諸室も内包する。もともと驚いたのは、最上階付近に居住スペースが用意されていたことだ。これは、大きな災害発生時において、早期に職場へ応召するための「待機宿舎」の役割を担っている。消防署内に住んでいれば、万全という訳である。数こそ多くはないものの、二人家族程度は住めるのではないか、と思える広さである。さらに、二四時間勤務に



上/食堂及び仮眠室の建設風景。
下/地階に設けられている屋内訓練室。ここでは、放水訓練が行われる。

対応した仮眠室や食堂も設置される。他に、事務室はもちろん防災啓蒙のための防災教室なども完備される予定だ。

消防士の方々に感謝を込めて

今回取り壊された旧庁舎の施工には「加賀田組」が関わっている。今でも当時の工事を担当した社員が在籍しているそうで、今回の工事受注は、会社全体の想いだっただろう。加賀田組は、明治二十八年、初代加賀田勘一郎氏が新潟県馬越村（現新潟市）に土木工事請負業を創業したが、そのはじまりだが、丸山所長もまた同じ新潟県出身だった。建築を学んでいた学生の頃、「地元になにか還元したい」という思いから入社を希望したそうだ。そうした思いを叶えるように、いくつかの工事を担当することができていた矢先、新潟県中越地震が起こった。社員の実家のある街も被害を受けたが、その折に東京消防庁からオレンジ色の制服を着た多くの隊員が出動し、人命救助に奔走していた姿は、今でも記憶に強く残っているという。丸山所長には「地元を救ってもらった」あの時の恩返しがいっつかできたら、という思いがずっとあったそうだ。「この現場を担当できることになった時、安全な建物を完成させることで、あの時の恩返しができる、と瞬時に思いました」。人と人とのつながりが、良い建物をつくっていくということ、改めて感じさせられた現場だった。



1階ピロティの様子。天井高は5mある。柱が大きいので、空間の大きさには違和感を覚えるほど。

ここで消防署の建設現場を通して、その全貌を探访してみる。まず一階。言うまでもないが、来客動線と緊急出動動線は明確に区分されており、天井高さが五層あるピロティには、ポンプ車及び消防車が、最大一三台駐車できるスペースが確保されている。「ピロティの床は無機質系浸透舗装材を使い、通常のコンクリート製床仕上げの約五倍程度の耐摩耗性を確保しています」。車輛などの頻繁な走行にも擦り減りが少ない、消防署ならではの仕上げだ。また、救急出動の回数が非常に多いため、待機する救急隊員の仮眠室は男女別に、そのすぐ上の階に用意されて



加賀田・河端建設共同企業体
東京消防庁練馬消防庁舎(24)
新築工事 現場代理人
丸山 栄策
Eisaku Maruyama

また昔に比べれば、若手社員にとっても、今の建設業界はつらいように思います。CADなどで作業の省力化ができる時代ですが、「楽しんで覚える仕事はない」を信条に、現場で一緒に墨だしするなど、実体験を通していろいろ経験し、学んでもらっています。日々、コツコツ努力することが、今後の現場人生を豊かにすると信じて実践しています。

Q あなたがこの現場で発見したことは何ですか？

A 昨今の現場では、作業員不足は深刻な状況で、工程管理が非常に難しくなっています。この現場もその例に漏れません。現場を巡回する際に、数カ月後の現場状況を常にイメージし、半年以上前から作業員や機材の手配、コストの調整などを行い、こうした状況に対応していますが、作業員がいなければ現場は進まない、彼らの存在の大きさに気づかされています。